### 室 町 時

むさしのくにかねさはといふところにむかしすみし家の

ふるさとのあさちかにはのつゆのうへにとこはくさ葉とやとる月かないたうあれたるにとまりて月あかき夜

兼好法師

六才ごろだといわれている。そのおり、金沢の地に遊ん かしさが強調されている。兼好が金沢文庫や称名寺と深 好がひさびさに金沢の地を訪れた印象を素材にしたなつ だ様子が「兼好法師自撰家集」にみられる。ここには兼 〔作者」 兼好法師 文献資料(徒然草)の条参照 現在金沢文庫に保管されている、兼好自筆の書状一通と 称名寺侍者あての書状懸紙(書状を包んだうわ紙=封筒) い因縁をむすんだのは二五、六才の頃からであろうか。 には、兼好の金沢来遊を物語る情趣ゆたかな場面が再現 また文化四年(一八〇六)に描かれた「兼好行状絵巻」 二通は、その消息を伝えるものとして名高い。 兼好法師が京都より関東に再び下向したのは三

されている。



好行状絵卷

明 治 時 代

金沢八景

洲崎晴嵐

**宵の雨のはるる洲崎の朝あらしまつの梢ははなれさりけり** 

(金沢名勝題詠集)

間宮八十子

東京人

〔**作者**〕 問宮八十子(一八二二—一八九一)歌人。間宮永好の妻。 久米幹文の姉。 水戸藩候の奥に仕う。

歌集に「松の下枝」「和歌玉石集」がある。

洲崎晴嵐

磯山の松の朝風吹にけり塩やくけふり立ものほらす

細川 潤

(金沢名勝題詠集)

瀬戸秋月

「作者」

細川潤 (不詳)

中村秋香 静岡県人

ふけぬらしあまの船うた声たえて瀬戸の入江の月そかたふく

(金沢名勝題詠集)

歌自在」を上刊。歌集に「秋香集」がある。明治三十年御歌所寄人となつた。 中村秋香(一八四一―一九一〇)歌人。静岡県生まれ。明治初期歌人として活躍したほか、新体詩をもなし、 「新体詩

瀬戸秋月

細川 潤

浦人も閩の戸さらし秋のよの月すみ渡る瀬戸の角橋

(金沢名勝題詠集)

小泉夜雨

小中村清短 東京人

やとかりしさとの名におふ小泉のおとかときけは夜半のむら雨

(作者) 小中村清矩(一八二一―一八九五) 東京生まれ。別号陽春慮。東大教授、文博。上代の法制に詳しく「官制沿革略史」

の外「歌舞音楽略史」が著名。「古事類苑」の編集にも尽くした。

小泉夜雨

乙艫帰帆

つく~~と雫の音をかそへけりすすのしのやの雨の夜すから

(金沢名勝題詠集)

黒川真頓 東京人

よるなみのおともの浦に夕されは舟こそ来よれ浦とよむまて

(金沢名勝題詠集)

【作者】 思用真頼 (一八二九—一九○六) 歌人。号荻園。 上州生まれ。黒川春村に国学を学び、その養子となる。

東大教授、 御歌所寄人、 文博。史学、文学その他百般に通じた。 遺詠集「墨水余滴」の他「横文字百人一首」「黒川真頼全集」

がある。

乙艫帰帆

真帆あくる船もおもけにみゆる哉さちあるあまのかへさなるらん

細川 潤

佐々木弘綱 三重県人

ふみくらの跡とひ来れはここなりとこたへ顔なる入相の鐘

称名晚鐘

(金沢名勝題詠集)

佐々木弘綱(一八二八十一八九二)歌人。 伊勢国生まれ。家号竹柏園。 明治十五年子の信綱と共に上京。

東大、東京高師の講師となる。 のち辞して歌道、学問道普及に尽力した。 「日本歌学全書」「詠歌自在」 「開化新題和歌梯」

「長歌改良論」など著書多し。新派和歌運動始動期に貢献した。

称名晚鐘

聞なれし音にや息も帰るらん林かくれのいり相のかね

(金沢名勝題詠集)

#### 平潟落雁

鈴木重嶺 東京人

すみこころここをよしとや平かたのあしへをさして雁の落くる

(金沢名勝題詠集)

〔**作者**〕 鈴木重嶺(一八一四—一八九八)旧幕旗本の家に生まれる。維新前後を通じて官界の諸職を歴任したが、その後官を辞

野島夕照

して東京に出、

短歌雑誌「詞林」を発行。

明治初期歌壇の名家。

村あしの末葉そよきて塩干かた落来るかりのけしきさひしも

細川 潤

(金沢名勝題詠集)

夕日てる野島をみれは立かへりあかぬこころをよする浪哉

(金沢名勝岡詠集)

山沢与平

和歌山県人

〔作者〕 山沢与平 (不詳)

野島夕照

細川 潤

島陰は安田のいさり火ほのみへて網干す磯に夕日残れり

(金沢名勝題詠集)

はつみ雪つもりにけりな内川のきしの松か枝なみにつくまて 内川暮雪

(金沢名勝題詠集)

久米幹文

茨城県人

〔作者〕 久米幹文(一八二八十一八九四)水戸の生まれ。通称は字三郎。水廼舎と号した。徳川斉昭に重用された。平田鉄胤、ともなる。

本居内遠に学び、東大講師となつた。「大八州学会」を代表する古典派歌人で、歌集には「水屋集」がある。

むれてゐる鷺かとみしは夕河の汀のあしにつもるしら雪

細川 潤

(金沢名勝題詠集)

# 大正時代以降

### 金沢にて

秋すでに水の上にあり雨はれし入江を魚の飛ぶしきりなる

(神奈川県郷上文学資料所収)

佐々木信綱

佐

々木信綱

金沢文庫 二首

金沢のいり江おだひに丘きよみ七百年を文ここにあり

神奈川県郷土文学資料所収)「山と水と」

岸ざくら池の心にさしおほふ真さかりの枝にかかる雨ほそし

(作者) まれる。 東大卒。歌誌「心の花」を主催。文博。歌集「思草」「新月」「常磐木」「豊旗雲」等多し。昭和十二年文化勲章受賞。 佐々木信綱 (一八七二—一九六三) 歌人、 国文 学者。 号は竹柏園。 伊勢国に国文学者、 歌人佐々木弘綱の長男として生

## 武蔵、金沢の海辺にて

青海の上に浮べる白雲の光帯びたり春来と見えて

青海よ汝が冷くも遙けくも連るにこそ目離ち難けれます。
なっぱん

海の方青く明るしかの見ゆる白帆に春の光あるかな

海よ今青に耀けとどろきて浪も寄り来よさみ しきものを

眺めをる心さみしみ海の岸離れてくれば足に砂鳴る

• 4

窪田空穂

神奈川県郷土文学資料所収)(「濁れる川」

11

l)

.

冬の海汝れの空虚を照らしつつさみしくも天の日は移り行く 岩井あり田より海より風の吹く「たも」の大樹の森の涼 赤き旗海のやぐらにひるがへり浪に光りぬ千人の魚 磯ちかき蓮田のなかに路ありてほのかに動く花と夏帽 身をおほひ心を隠す男女無し海水浴はめざましきかな 初秋の文庫が谷を見めぐりぬ水草の香と松かぜの 夏島が剝がれて白き一面を隠さぬも好し炎日のもと 金沢や安房を目がけて人の飛ぶやぐらのたの秋の しょ しら波の携へてこし海布なれども乾けばさびし黍の葉のごと にしへの文庫の主なる顕時を敬するこころ鐘ひとつ撞く 南北」「天地玄黄」「うもれ木」「檞の葉」などがある。 躍した。鉄幹、 新詩社創立。 山と海 窪田空穂(一八七七―一九六七)歌人、国文学者。長野県生まれ。早大卒。早大教授。新詩社に入り雑誌「明星」で活 与謝野寬(一八七三―一九三五)歌人・詩人。号を鉄幹という。京都生まれ。落合直文、森林太郎に師事、 機関誌「明星」を発行。明治三四年鳳晶子と結婚、 武蔵金沢にて 晶子とは別に独自の歌風。歌集「まひる野」「濁れる川」「青朽葉」等著書多し。 明星派の歌風の全盛を極めた。慶大教授、 与謝野 与謝野! (昭和六年冬柏七号) (昭和六年冬柏七号) 晶子 寬 詩集、 歌集に「東西 明治三二年

関誌「明星」	な(・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	あづまやの提燈などの渡りこば哀れならましひらかたの橋	松しげる野島うつくし夏島の一つの家と見ゆる姿も
はちす田に稲田つらなりそのをちに磯の松見ゆ島二つ見ゆ (昭和六年冬柏七号)金沢吟行	ちず田に稲田つらなりそのをちに磯の松見ゆ島二つ見ゆ(昭和六年冬柏七号)金沢吟行(作者)「佐保姫」「春泥集」の他「新訳源氏物語」がある。「佐名」与謝野晶子(一八七八―一九四二)歌人。堺市生まれ。与謝野寛と結婚。新詩社に加わり、機関誌「明星」	す田に稲田つらなりそのをちに磯の松見ゆ島二つ見ゆ (昭和六年冬柏七号)	す田に稲田つらなりそのをちに磯の松見ゆ島二つ見ゆ(昭和六年冬柏七号)室沢吟行の橋を渡りて宵暗にかまくらびとと別れけるかな( ・ ・ )まやの提燈などの渡りこば哀れならましひらかたの橋 ( ・ ・ )
	、内容は大胆奔放。歌集「みだれ髪」「佐保姫」「春泥集」の他「新訳源氏物語」がある。    与謝野晶子(一八七八―一九四二)歌人。堺市生まれ。与謝野寛と結婚。新詩社に加わり、機関誌「明星」	清新、内容は大胆奔放。歌集「みだれ髪」「佐保姫」「春泥集」の他「新訳源氏物語」がある。 著) 与謝野晶子(一八七八―一九四二)歌人。堺市生まれ。与謝野寛と結婚。新詩社に加わり、機関誌の橋を渡りて 宵暗に かまくらびとと別れけるかな	清新、内容は大胆奔放。歌集「みだれ髪」「佐保姫」「春泥集」の他「新訳源氏物語」がある。
の橋を渡りて宵暗にかまくらびとと別れけるかなりとなった。ないでありとば哀れならましひらかたの橋(・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	づまやの提燈などの渡りこば哀れならましひらかたの橋しげる野島うつくし夏島の一つの家と見ゆる姿も	しげ	
たの橋 ( / / )	たの橋(	よかし	よかし  へ
の橋を渡りて宵暗にかまくらびとと別れけるかなの様々などの渡りこば哀れならましひらかたの橋(・・・)ける野島うつくし夏島の一つの家と見ゆる姿も(・・・)寺入相の鐘打つことの絶えても秋は寂しかりけれ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	提燈などの渡りこば哀れならましひらかたの橋島うつくし夏島の一つの家と見ゆる姿もの石をば伴ひて立たずはちすの葉にも寝よかしの鐘打つことの絶えても秋は寂しかりけれ	島うつくし夏島の一つの家と見ゆる姿もの石をば伴ひて立たずはちすの葉にも寝よかしの鐘打つことの絶えても秋は寂しかりけれ	の石をば伴ひて立たずはちすの葉にも寝よかしの鐘打つことの絶えても秋は寂しかりけれ
渡りて宵暗にかまくらびとと別れけるかなの毎打つことの絶えても秋は寂しかりけれて立たずはちすの葉にも寝よかしていっていっていっていますができまどの避れならましひらかたの橋のからし夏島の一つの家と見ゆる姿も ロッカン はんだい はちずの葉にも寝よかし ロッカン かしきほど小暗くて文庫のあるじ尊霊眠る ロッカン かしきほど小暗くて文庫のあるじ尊霊眠る	やの提燈などの渡りこば哀れならましひらかたの橋の舞打つことの絶えても秋は寂しかりけれて立たずはちすの葉にも寝よかしてからとの絶えても秋は寂しかりけれてかりまほど小暗くて文庫のあるじ尊霊眠る	る野島うつくし夏島の一つの家と見ゆる姿もとなっていまたが、おおの石をば伴ひて立たずはちすの葉にも寝よかしくなっかしきほど小暗くて文庫のあるじ尊霊眠る	よ姥の石をば伴ひて立たずはちすの葉にも寝よかしていれの鐘打つことの絶えても秋は寂しかりけれてつかしきほど小暗くて文庫のあるじ尊霊眠る
橋を渡りて宵暗にかまくらびとと別れけるかな	やの提燈などの渡りこば哀れならましひらかたの橋のいたがいの御称名寺しかれども文庫のあるじ尊霊眠るなつかしきほど小暗くて文庫のあるじ尊霊眠るなつかしきほど小暗くて文庫のあるじ尊霊眠るくりの観称名寺しかれども文庫の主の名も忘れめや	る野島うつくし夏島の一つの家と見ゆる姿もといいます。これの鐘打つことの絶えても秋は寂しかりけれなつかしきほど小暗くて文庫のあるじ尊霊眠るくいかりまないかがいます。	よ姥の石をば伴ひて立たずはちすの葉にも寝よかしていれの鐘打つことの絶えても秋は寂しかりけれなつかしきほど小暗くて文庫のあるじ尊霊眠るけの御称名寺しかれども文庫の主の名も忘れめや
橋を渡りて宵暗にかまくらびとと別れけるかな (	まやの提燈などの渡りこば哀れならましひらかたの橋とけの御称名寺しかれども文庫のあるじ尊霊眠るになっかしきほど小暗くて文庫のあるじ尊霊眠るにおいっている野島うつくし夏島の一つの家と見ゆる姿もにおいめでは、	では、	石よ姥の石をば伴ひて立たずはちすの葉にも寝よかしったけの御称名寺しかれども文庫のあるじ尊霊眠るったけの御称名寺しかれども文庫のあるじ尊霊眠るったができたが暗くて文庫の主の名も忘れめやったいは蓮池の気に濡れわたる山の御寺の低ききざはしったいは蓮池の気に濡れわたる山の御寺の低ききざはしったいは
この橋を渡りて宵暗にかまくらびとと別れけるかな ( ク ク の手ざはりならぬものも無し北条寺の山門の中 ( ク ク の手ざはりならぬものも無し北条寺の山門の中 ( ク ク の手ざはりならぬものも無し北条寺の山門の中 ( ク ク の手ざはりならぬものもましからましひらかたの橋 ( ク ク の手ざはりならぬものも無し北条寺の山門の中 ( ク ク ))	「やの提覧などの渡りこば哀れならましひらかたの橋」 「なつかしきほど小暗くて文庫のあるじ尊霊眠るなっかしきほど小暗くて文庫のあるじ尊霊眠るなが、「は蓮池の気に濡れわたる山の御寺の低ききざはし 「などの おというでは との絶えても秋は寂しかりけれ 「などの石をば伴ひて立たずはちすの葉にも寝よかし 「などの おというでは との絶えても秋は寂しかりけれ 「などの おというでは としゅ	る野島うつくし夏島の一つの家と見ゆる姿も なつかしきほど小暗くて文庫のあるじ尊霊眠る なつかしきほど小暗くて文庫のあるじ尊霊眠る なっかしきほど小暗くて文庫のあるじ尊霊眠る ながれがいる。との絶えても秋は寂しかりけれ くながれる。はかれども文庫の主の名も忘れめや くながれる。との絶えても秋は寂しかりけれ くながれる。との絶えても秋は寂しかりけれ くながれる。との絶えても秋は寂しかりけれ くながれる。との絶えても秋は寂しかりけれ くながれる。との絶えても秋は寂しかりけれ くながれる。との絶えても秋は寂しかりけれ。	よ姥の石をば伴ひて立たずはちすの葉にも寝よかし 、 、 、 、 、 、 、 、 は 、 で 、 の は の が が が が が が が が が が が が が が が が が
「たっぱりならぬものも無し北条寺の山門の中	をでしている。 では重池の気に濡れわたる山の御寺の低ききざはし なつかしきほど小暗くて文庫のあるじ尊霊眠る なつかしきほど小暗くて文庫のあるじ尊霊眠る なっかしきほど小暗くて文庫のあるじ尊霊眠る なっかしきほど小暗くて文庫のあるじ尊霊眠る でよ姥の石をば伴ひて立たずはちすの葉にも寝よかし でいる野島うつくし夏島の一つの家と見ゆる姿も でいる野島うつくし夏島の一つの家と見ゆる姿も	では では では では では では では では では では	よ姥の石をば伴ひて立たずはちすの葉にも寝よかしている。なつかしきほど小暗くて文庫のあるじ尊霊眠るなつかしきほど小暗くて文庫のあるじ尊霊眠るなつかしきほど小暗くて文庫のあるじ尊霊眠るなっかしきほど小暗くて文庫のあるじ尊霊眠るないが、がが世吹く日知らぬ世の金沢文庫称名寺訪ふない。
「「たっとの海がではあるできましいらかたの橋」であるでは、までは、いまでは、いまでは、いまでは、いまでは、いまでは、いまでは、いまで	である蓮のみどり葉の果てより帰りこし真昼かな ( ) のちなる蓮のみどり葉の果てより帰りこし真昼かな ( ) のちなる草のみどり葉の果てより帰りこし真昼かな ( ) のちなる草のみどり葉の果てより帰りこし真昼かな ( ) のちならずいがでは、 ) のちならがでは、 ) のちならがでは、 ) のもならがでは、 ) のちならがでは、 ) のもならがでは、 ) のもならならがでは、 ) のもならならがでは、 ) のもならならないがでは、 ) のもならならないがでは、 ) のもならならないがでは、 ) のもならないがでは、 ) のもならないがでは、 ) のもならないがでは、 ) のもないがでは、 ) のもないがではないがでは、 ) のもないがではないがではないがではないがではないがではないがではないがではないがでは	では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、	よ姥の石をば伴ひて立たずはちすの葉にも寝よかし (なかがぜ吹く日知らぬ世の金沢文庫称名寺訪ぶ (なつかしきほど小暗くて文庫のあるじ尊霊眠るなつかしきほど小暗くて文庫のあるじ尊霊眠るないかりければ、 (ないがで、日知らぬ世の金沢文庫称名寺訪ぶ (ないがで、日知らぬ世の金沢文庫称名寺訪ぶ (ないがで、日知らぬ世の金沢文庫称名寺訪ぶ (ないがで、日知らぬ世の金沢文庫称名寺訪ぶ (ないがで、日知らぬ世の金沢文庫称名寺訪ぶ (ないがで、日知らぬ世の金沢文庫称名寺訪ぶ (ないがで、日知らぬ世の金沢文庫が名寺訪ぶ (ないがで、1000年で、

格

磯のかぜ松に吹けるを後ろにし語りながらに入れる山門	$\sim$	11	V
前に見る干潟と入江あかるきにけぶりて遠し神武寺の山		ŋ	$\overline{}$
海青しただ見るものは三角のしら帆とまろき雲の一ひら		"	$\cup$
歌誌「真朱」こも曷或する。善悲こ「失命と高子」がある。「作者」 菅沼宗四郎(一八八四―一九六〇)歌人。茨城県生まれ。税関勤務、	「冬柏」創刊と同時	創刊と同時に同人となり、	り、作品を発表、
; ; ;	桑野信子	子	
風に乗り近き野島の上に去る秋のとんぼの銀いろの羽	(昭和	昭和六年冬柏七号)	号)
海に沿ふ風も暑さも坂路も古きみ寺の山門の尽く		"	)
涼しきは野島夏島ならび立つその中ほどの浦のともしび		11	$\cup$
秋かぜがあるむらさきの袖振りてすでに六浦の入江にも立つ		11	$\overline{}$
あきらかに行手を知らでただよへる秋の白雲磯の夕かぜ		"	$\overline{}$
( <b>作者</b> ) 桑野信子(不詳)			
卿と磯 武蔵金沢にて	奥田松太郎	太郎	
たそがれの入江のらへの紫にしろき香炉を置ける夏島	(昭和	昭和六年冬柏七号)	号)
磯べより帰れるむれが吊瓶して汲めば涼しや森かげの井戸		11	J
をさなくて叔母と歩みし日を思ふ文庫が谷の木下路かな		11	O
岬ゆき高きに見るはまばらなる松の林と海の入日と		11	$\sim$

松立てる岬のうへのたそがれに海を見て踏む沙の幾段

[**作者**] 奥田松太郎 (不詳)

鎌倉其他 金沢にて

みづからをあらはに見たるここちしぬ満干はげしき六浦の海

磯の家十三人がかこみたる卓に加はる大やんまかな

はろばろと越ゆれど猶も瀬のありて我道に似る六浦の浜

歩みゆく干潟のなかに涼しくもまろき鏡をたたへ たる水

落つる日が染めのこしたる雲の帯ななめに引きぬ安房の山より

【作者】 近江満子(不詳)

冬柏抄

乙艫の汐干に群れて貝拾ふ人間鶴を照らす夏の日

蟹の穴ら無数にあきて各に蟹あり生をたのしめる海

汐干潟沙やはらかく足重し海の憂ひを踏むにやあらん

青ペンキ光れる小家をもてあまし乙艫の海沖へ退く

称名寺銀杏木高く池低く金沢山に五時の日当る

个底に小柴の磯の 藁屋根が 覗きそこより起る 海かな

乙艫の帰帆洲崎の炊煙を目の下にして萩動く山

近江満子

(昭和六年冬柏七号)

\(\text{\\chi}\)}}}\end{\(\text{\init}\)}}}}}}}\endremath\)

1

11

^ // // // · · ·

平野万里

(昭和六年冬柏七号)

*"* 

*"* 

*"* 

. .

*"* 

			その没後、斎藤茂吉の指導を受けた。歌集に「白埴」「あかつき」「鳴瀬」等がある。
「アララギ」に入会。島木赤彦に師事。	に入会。		【作者】 広野三郎(一八九七― ) 東京生まれ。国学院大学卒。東大史料編纂所に勤務。
)	"	$\widehat{}$	実時の住みにし跡に鉄骨の文庫建つる工事起れり
ぞう川県銀士交学資料所収)	ル男組出	<b>(</b>	宝物を並ぶる庫裡にくれなゐの大花躑蠋咲き盛りたり
	<b>B</b>	(「白埴」	いにしへの大き御寺に我が来れば結界を越えて人の家建つ
		広野三郎	称名寺、金沢文庫
	<del>発</del> 行。	和二一年まで	近江満子らが主に編集した。誌名の由来は晶子の好んだ椿の花による。昭和五年から昭和二一年まで発行。
平野万里、田中悌六、		ただし短歌が主力で、	〔解説〕 「冬柏」与謝野寛、晶子の主宰誌として、第三次「明星」的な性格のもの。たご
			【 <b>作者</b> 】 井上苔渓(不詳)
$\bigcup$	"		海のかぜ吹きぬく森の井のもとに寄りて汗ふく師の白き肌
$\bigcup$	"	$\widehat{}$	もてなさんやうこそ無けれ磯の家蓮の葉に盛る里の饅頭
$\smile$	"	^	とんぼ釣る子らは前なる田に隠れ竿のみ動く蓮葉の中
$\overline{}$	"	<u> </u>	子らはみな磯の遊びに習ひけりとんぼをば釣り貝を採りつつ
1号)	(昭和六年冬柏七号)	(昭和六	事そぎて心やすけれはしための里に今年も暑を避くる家
		井上苔溪	磯の家(二)武蔵の金沢にて
	た。	柏」を創刊し	の主要作家として活躍。歌集「若き日」。昭和五年、新詩社詠草の発表機関として「冬柏」を創刊した。
「明星」中期以降	学んだ。	与謝野鉄幹に学んだ。	〔作者〕 平野万里(一八八五—一九四七)埼玉県生まれ。東京帝大卒。新詩社に入り、
)	"	$\overline{}$	山の亭安房上総など模糊として夕立めける海のたそがれ

外山且正

かへりゆくかりがね見えて金沢の入江のはしにはるさめのふる

神奈川県郷土文学資料所収)「現代短歌全集十九巻」

〔**作者**〕 外山且正 (不詳

金沢称名寺

南部松岩丸

思ひみる代の興亡はさもあらばあれ谷戸の穂波に照れる日しづか

神奈川県郷土文学資料所収)

Щ の間のこの閉寂を宜しとして文明のもとを護り給へり

りたる阪東成果思へかも完けき五輪の墓石の立ち

興

11

(作者) 南部松若丸(不詳―一九四八)歌人。慶大在学中より香蘭詩社に入会。大学卒業後松屋デパートに入り、 短歌に精進。

香蘭同人から選者となり日本歌人クラブ会員として活躍した。横浜松屋には昭和十年前後の数年を勤務し、 その間磯子に在住、

後進を指導した。

称名寺四首

高見房一

冬寂びし寺の境内には長くゐず妻と吾とは裏門にむかふ

神奈川県郷土文学資料所収、「線表」

崖下に冬深き宿は見ゆれども逃れ来れる我等にはあらず

冬の夕日は田のはて低くより射しゐたる入海の渚妻と歩めり

没りがたの光けぶらふ冬枯れの潟田に響く船笛の音

「作者」 高見房一(一九〇二―

東京生まれ。横浜中央電話局勤務。斉藤茂吉に師事、 「アララギ」入会。昭和二八年

「久木」創刊。歌集「線表」がある。

吉野秀雄

春といへど風はするどし海苔粗朶をめぐるうしほのさざら波寒き	(「	神奈川県郷土文学資料所収)「苔径」	料所収)
波よせて濡るる渚の藻にまじりみだれてもとな紅き心太草		"	$\overline{}$
海近き六浦のみちはうらうらに春日ながるる貝敷ける道		11	$\rightarrow$
林泉図絵寺に伝はりてしのばるる現の池は春のひそけさ	$\frown$	"	$\smile$
くれなるの梅散る庭に葭簟もて海苔乾されてぞ人のけもなし		11	$\cup$
〔作者〕 吉野秀雄(一九○二─一九六七)歌人、群馬県生まれ。病気のため慶大中退。子規の作品に啓発されて作歌と国文学を	死の作品に	啓発されて作歌-	と国文学を
独修。会津八一に師事。著書「良寛歌集」「良寛和尚の人と歌」。歌集「苔径集」「早梅集」「寒蟬集」他多数あり。	<b>光」「寒蟬</b>	集」他多数あり。	0
	尾山篤二郎	以	
ひんがしの安房の清澄ゆふぞらに赤く匂へり霽れむや今宵	(雪* 客)		
田	尾山篤二郎	以	
運田の蓮の葉の露はら ふ音幽けきおともねむりがたみす	(雪客)		
夏の夜の月のはちす田白緑を崩きたるごとく広やかにして	( " )		
さみどりの夢かも開け月の夜の精霊の遊び見るここちすも	(		
美しき日の夕暮やはちすだのむからの小みち子供駈けゆく	( v )		
船笛(廿四年十、十一月)	尾山篤二郎	<b>以</b>	
何故か頻りに船のボーきこゆ小柴が崎ゆあまたたび鳴る	(雪さぎ		

堂裏の篠の刈

尾山篤二郎

散りたまる池の落花を見たるのみ時過ぎつれば見る物ぞなき (雪\* 客)

称名寺の裏の柴山木の芽さし明るき径が一すぢとほ

りぐひ踏みわけて向うの山は明るかりけり

朽ちはてし波よけ杭のぐるりには青海苔のみの干潟なりけり

独

箸おきてひとり酌するこの夕べいのちを洗ふごとくすずしき

梅見んとひとりさまよふ古寺の萱草ふかく棟くもりたる

西にむかふみぎはの梅に光さし姫軒しのぶからび生ひたる

柏槇の巨き樹の上をかまくらの鋳なほしがねのおともひびかず

野島公園歌碑

枯山も温とましげに靄籠り安らやすらと暮れゆかんとす

晩年称名寺門前に住み、金沢区が新設されたことを郷里金沢市にちなむ地名として大変喜こばれた。文学博士。芸術院賞受賞者。 【作者】 尾山篤二郎(一八八九—一九六三)金沢市生まれ。三二才の時に上京、 若山牧水、 前田夕暮等と知る。歌人、 国文学者。

歌集に「さすらひ」「明る妙」「雪客」など多数がある。昭和五十年、門弟が野島公園に歌碑を建設、金沢を愛した歌人。

( 1/2 )

尾山篤二郎 (雪客)

尾山篤二郎

(雪客)

尾山篤二郎

(晩年の作)